

# 子宮頸がんワクチン「副反応」 市民ら対象、勉強会

あす杉並で

子宮頸がん予防をうたったワクチン接種がきっかけで、各地の女子中高生に痛みやまひなどの深刻な症状が起きている問題で、「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」は28日、市民や議員を対象にした「子宮頸がんワクチン緊急勉強会」を杉並区で開く。

問題のワクチンは「サーバリックス」「ガーダシル」の2種。今月から小学高1の女子に接種が「努力義務」となった。

だが3月、同区内の女子中学生に接種後重い症例が出たことが判明すると、各地で問題が顕在化。父母らで作られた「被害者連絡会」には、300人余の被害相談が寄せられた。

厚労省はこうした症状を、因果関係はわからないものの接種を引き金に生じた「副反応」と位置づけ、病院や製薬メーカーに報告を求めている。

昨年12月末現在で両ワク

チンは829万本販売され、副反応報告は1926人。うち「重篤」とされる報告は計861人だ。厚労省が「実質は軽度」とみている約半数の「失神や失神寸前」を除いても、100万本当たり52人に「脱力」「歩けない」「まひ」などの重い副反応が出た計算だ。これはインフルエンザワクチンの重い副反応の20倍以上。1人3本接種のため、リスクはさらに高い。

厚労省は、サーバリックスの「重篤」報告に筋力低下や感覚まひなどが出る神経疾患「ギランバレー症候群」や「急性散在性脳脊髄炎」が12件あった点を重視。3月の副反応検討会では、医師や接種者に注意を促すワクチンの添付書類に、新たにこの二つを「副反応」として加筆するようメーカー側に指示した。

だが、この問題に詳しい宮城県佐藤庄太郎・内科医は「重い副反応を訴える1人1人の症例を詳細にみると、神経疾患や自己免疫の異常を思わせる症状はもっと多く、もっと絡み合っ

28日の勉強会では、症例の共通点などを紹介。民間の薬害監視団体「薬害オンブズパースン会議」の隈本邦彦・江戸川大学教授が、このワクチンの費用対効果や諸外国の研究などを解説する。接種の実務を担う地方自治体の議員に向けても「自治体のチェックポイント」「議会質疑に使えるデータ」などを紹介する。

「あんさんぶる荻窪」(荻窪5丁目)4階で、午前10時〜午後5時。市民は無料。議員は23区内が3千円、区外・都外が2千円。問い合わせは連絡会(042・594・1337)へ。

(斎藤智子)

13 4. 27

朝 日